カレッジ通信

編集・発行
東京建築カレッジ

百聞は一見に如かず。カレッジ見学会は5月29日（金）江東実習場で！

職業教育訓練の国際会議で教育実践を紹介！

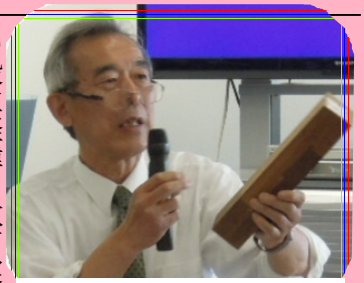
「東京建築カレッジ」は日本を代表する先進事例

日本大工の伝統的な手道具も紹介

5月2～3日、「北欧の職業教育訓練に関する国際会議」が大東文化大学・東松山キャンパスで行われ、日本における先駆的な事例として東京建築カレッジが紹介されました。

96年の開校当初から11年間、カレッジの教務を担当した渡辺顕治元教務部長が東京建築カレッジの設立経緯と教育実践を発表しました。

大工道具の説明を受ける北欧からの参加者



熱く語る渡辺顕治さん

渡辺氏は「あえて大工の養成校とせず、『新しい時代の建築スペシャリストの養成』を打ち出し、東京土建が組織する広範な職種に対応する学校に成長した」と説明。今の住宅建築はプレカット材と金物を電動工具で固める作業ばかりだが、「現場ではあまり使われない伝統工法を基礎から教え、実習棟を建てる。ここに我々の挑戦がある。研修生にとっても魅力あふれる教育だ」と強調しました。

講演では伝統的な大工仕事の道具の紹介も行われ、ドイツ、ノルウェー、スウェーデンからの参加者が興味深げに手に取っていました。

職業能力開発総合大学校の田中萬年名誉教授は、「企業別労組中心の日本社会で労働組合を母体に始まったということに大きな意義がある。ただ、社会的条件に起因する課題もある。日本では職業と結びついた教育訓練が厚生労働省系と文部科学省系に分離されているが、建築カレッジは文部科学省管轄の学校と同等に認知されるべきだ」とコメントしました。

参加者は約15人でしたが、全国の大学から職業教育訓練の研究者が集まり、北欧・独の先進事例を吸収し、日本における今後の課題を提起する有意義な国際会議でした。

カレッジ生インタビュー！　美大では油絵を専攻。ものづくりに関わりたくて職人の道へ。

20期生 石川瑛子さん（23歳）に聞く。カレッジ入学のきっかけは？

美大では油絵を描いていました。学芸員になる勉強もしていましたが、人の生活に役立つものづくりに関わりたくて、ハローワークを通じて今の会社へ。修理・修繕の仕事もあり、私の経験が生かせると思いました。

社長から、カレッジの案内と本を渡され、入学を勧められました。美術でなじみのある木を扱う、伝統工法の木組み技術を身につけ、色々な仕事に生かしていきたいです。

事業主総会・交流会で派遣の意義を確認

カレッジ研修生派遣事業主総会・研修交流会が５月１３日に池袋校舎で開かれ、派遣事業主、講師・指導員など３６人が参加しました（＝写真）。カレッジを新人育成に活用してきた守屋工務店（小金井市）の守屋辰彦社長が特別講演。守屋社長は「無垢の新人を育てることには特別な意義がある。カレッジは重要な存在だ」と語りました。